

幼稚園の時期にどれだけのことを期待できるか

社会的遊びを主とした問題



黒田成子

最近幼児の保育に当って従来のように成熟を待つ保育よりは積極的に教師の方で適切な時期を捉えて意図的に指導を行なう必要があると言われている。

五才児といっても近頃の子どもは体格も向上し、マス・コミなどの影響で知的発達も従来よりずっと早熟である。功技台の少々むずかしいものの使用も、水道方式をとり入れた奴の習得も、小さい代議士のように複雑な話合も、そして新しいアイディアの造形もこなせる現代の子どもである。そうした子どもたちにいまさら砂場とか水遊び、積木などという原始的なものを取り上げる必要があるだろうかという人もあるかもしれないが、わたしは与えられた題目の内容としてこのことについて記してみることにした。

今かりに非常に進歩してきたように見えるわが国の幼児教育界の

表面的な動きから眼をそらして子どもそのものに焦点を向けてみよう。そうすると砂場とか積木などは子どもたちの生活とほきつてもきれいな主要な部分になっていることにはいまさらのように気がつくのである。幼稚園の園庭になくてもはならない環境の一部として砂場がある。それは滑り台やふらんこが必要であると同じようなものとしてどんな貧しい園にもそなわっている設備である。しかもつかいようによっては随分いきいきした遊びや効果を出すことのできる設備であるのに、それが案外つかわれていない現状ではないだろうか。

事実幼稚園や保育園をいくつかまわってみると、砂場や積木遊び

は計画された保育以外の、いわば山と山にはさまれたせまい谷間の
ような位置しか占めていない。朝の集まり以前に皆がそろうまでと
か、製作のすんだあと、リズムの始まるまでのちよつとした時間、
あるいは昼食後のひとやすみとか、息ぬかしといった程度で行なっ
ているものが多い。教師はシャングル・シムや他の施設を利用させ
ると同じ気持ちで園庭全部を見渡し、怪我のないようにと注意してい
る。そして砂場に子どもがいれば「あ、砂いじっているから大丈夫
夫」と思っているだろうか。

子どもの方は楽しそうに砂遊びをしていますが、いつ自分たちがや
めなければならぬかをよく心得ている。一人の子どもが勢いよ
く砂を飛ばしながら穴を掘っている。すると他の子どもが「だめだ
よ、そんな事したらくずれちゃうよ」と言う。「だって今のうちだ
よ」「あつ、そうか、今のうちだね」と相手はうなづく。「今のう
ちだ、今のうちだ」と口ずさみながら子どもは掘りつづける。まも
なく先生が「お片づけ」と呼びに来ると子どもたちは砂場の道具を
かきあつめ、一斉にホールの方へ駆けて行く。子どもは自由を与え
られていたら、ようやくできはじめた汽車の線路やトンネルをこわ
すどころか、丹念に削りつづけていったであろうにと思ふとまこと
に惜しい気がした。

朝の大切な時間に勉強もしないで砂いじりばかりさせてはわ
さわぎ幼稚園に出しているかいないかと教育熱心な父兄たちが「ほう

だろう。しかし、教育というものは一見たくさん経験をもった教
師が未経験の子どもの手引きをしながら、知識を子どものレヴェル
にふさわしくかみくだいて与えるものであるように考えられやすい
が、ほんとうはそのような簡単なものでないことはわたしたちもよ
く承知している。生きた教育とはかりに教師が助言者としてそこ
いたとしても子どもが自分で「あ、これだな」と感じとっていくも
のでなければならぬと思う。

ことに「社会」の領域では「誰でも仲良くするのですよ」とい
くら教えても、そして子どもがたとえ立派な答ができたとしても、
実際にこれを実感として感じ、経験として身につけていくのでなけ
ればほんものとはならない。

水遊び

次に水遊びの例をとりあげて子どもの姿をみることにしたい。

△例▽

七月×日 午前十時—十時五十五分

一年保育児が組全体で園庭に出てお洗濯をしている。組の中で
も体力があるのに気が弱く、いつも人にやりこめられているKと、
行動は鈍いが口の達者なRの二人の男児と、いるかいらないかわか
らないほど静かなE子とが砂場で道具をつかって遊んでいる。三
人は他のフルーフのつかっているタライのあくのを待っている。

やがてタライがあくと三人はハケツで水を汲みハンカチの洗濯

〈幼稚園の時期にどれだけのことを期待できるか〉

を始めた Rは石けんをつけてハンカチをもむ。

K「石けんかしてくれよ」

R「そこにあるじゃないか」とKの頭をたたく。Kが石けんをつかうと次にRはこれをとりあげ「きれいに」と「おかたづけ」の歌の一節を口ずさむ。

E子「かして」

R「いまつかっているところだ（Kに）バカ、いまアルコフル
完売だよ」

K「ほくアルコフルだよ」

R「するいそ、するいそ」

R（石けんをKになすりつける。KがRをたたく。Rは知らないふりをしていそいでハンカチで石けんを包む）

K「つつんじゃいけない」

E子「Kちゃんだつてつつんたわ」

K「まちがえたんだ」

KとR言い合う。そのときT先生がまわってくるとRは一段と声を高くして

R「だめなの、自分はかりつかっちゃいけないの」と強く言い、

Kはふくれる。

R「このアワ誰かにあげる」（乳持よきそうに洗う）。三人は石けんをつけてはハンカチをこする。そのうちハンカチが水中で互に

まきれてしまつてKとRはとりあいになるが、すぐまた所有がわかる。

E子「アクシは名前かかいてあるからいいの、カワシマ、ユミ
コ」

E子（自分のハンカチの模様を見て）おとなになるまで洗ったらこれみんな落とせる？」

R「おとなになるまで？　へー、がまんが大へんたよ」

E子「がまんしたら死んじやう」

.....

K「もうこんなになっちゃった」

E子「あたしも、こんなにきれい　サマサマになっちゃった（模様をみせる）しほつてこうやるの、お母さんやっているもん（水の中でしほつてみせる）きれいでしょ」

先生「ああきれいな」

E子はシャングルの一番上までよじのほり、体を支えるとシャングルから手を放し、ハンカチをハッハッとたたいて、ていねいにひろけて干すところは母親の様子をいつも見ていることが想像される。

やつとKもRも洗い終る。干すとき

R「このハンカチもついで」とKに言い、

K「うん」と答えて二人は仲よくやっている。三人はハケツてつ

かった水を汲み出しては捨てに行く、水が少なくなるとクライをかかえたがうまくハランスがとれないでヨタヨタする

はじめRはKのすぐ右隣にいたが先生に

「Rちゃん、どっちへ寄ったらいいの」といわれ、

「あ、そうか」といって右の方に間隔をちょっとおいて手をもちなおした。

クライはやっと三人で運べた

この例はまだ交友関係がスムーズにいったいない子どもたちのありのままのやりとりである。RとKはたびたび喧嘩しそうになるが、気持の良い水いじりの感触と第三者のE子という存在が媒介となつて二人の関係はどうやら同じ方向へと保たれている。三人のうちでRがもっとも身勝手だが友たちからせめられてもうまく言い逃がれたり、先生の前では良い子らしくよそおったりする。KはRに言いまかされるとすぐ暴力をつかい適当なコトハが出てこない。しかしKはRがハンカチで石けんを包んだことをせめるとかえってE子から「Kちゃんだつてつつんだわ」といわれた。これに対して「まぢがえたんだ」と言えたことはKにしては進歩だ。E子は父親のない家庭で母親と静かな二人暮らしをしている。石けんをRやKが独占していてもなかなか「かして」と言えない。やつと言ったがRに断られると黙ってしまう。正しい主張ができるように仕向ける必要があ

ろ。この日の「おせんたく」という作業はこの子どもたちにそれぞれの間関係や社会性を伸ばしていくのによい場となった。

ふつう水遊びは内気の子どもには自我をもちたて、自信をつけ、また感情のたかぶつた子どもには穏やかさを与えるためによいと言われている。砂もこれに似たような効果がある。晴れた日にさわやかな外気の中でいじる砂の感触は指に心地よく、気分をのびのびとさせるものがある。しつとりとした砂はいじられるがまま、形づくられるがままにそこにある。問題をもつた子どもでも抵抗を感じないでらくな気持ちで遊べるわけである。年令が進むにつれて、せまい砂場ではぶつかりあひも出てきて対人関係のうえで多くの問題が現起される。

砂場遊び

次に年長児が長時間にわたつて砂場で社会的な遊びをした例を記してみよう

八例

二年保育児の組 第三学期のある日 六才に近い男児たち数名が遊んでいる

港へ見学に行った経験に刺激されたらしく、砂場ではさかんに舟やトック、事務所、切符売場、運河などがつくられている。はじめ船(古びた木製の玩具)がうばい合ひであったがようやく遊びが軌道にのつたようだ

〈幼稚園の時期にどれだけのことを期待できるか〉

「発送係、発送係、ひき船を送って下さい」

「ひき船、おい、ひき船出せ」

「もしもし、いま出しました」

「おーいどけどけ（ひき船のつもりらしい小型の積木を押し進める）」

「つなをおろせ、Ｔちゃんなわ」

「早く、あと五分で出発、大阪行」

「ハカ、貨物船だよ、キューハーへいくんだよ」

あまり遊びがおもしろそうなので、それはジャングル・シムを根じろにしておうちごっこをしていた女兒たちが砂場の船員たちにもまい積木と切り紙をませたおべんとうをつくって配達しはじめ、うちは食堂屋に模様かえをして遊びが発展していった。

積木遊び

積木遊びもまた子どもにゆったりした気分を与え社会性の発達を促す遊びである。また創意や想像力を養い安全な冒険を与えることもあげられる。ある五才児組を受け持っている先生が四月から十二月までの記録中積木遊びで発展的であったと思われるいくつかの遊びをひろってみた

お家ごっこ、飛行機あそび、お池作り、遊覧船ごっこ、自動車ごっこ（砂場で自動車道路と車庫ができる。積木の自動車同士で電波連絡をとる）宇宙ごっこ、お家ごっこ（ジャングルの所へ積木をも

ってきてアパーをつくり、そはに遊園地までつくる）、プールごっこ（積木で飛び込み台をつくり、切符整理係もつくる）、汽車ごっこ（ストーフの近くに積木で暖房車、寝台車、食堂車などを作る）。

四月頃のクルーフはせいせい五、六名であり、持続時間が二十分位であったが十一月頃には十二、三名、ときには二十名位で遊び、時間も一時間以上、一時間半位つづいている。中には「先生お片付けにしちゃ絶対困るわ、今一番忙しいところなの」とわざわざ先生に言いに来る子どももある。子どもは先生がせっかく計画したフランにのってこなくて、かえって子どもたちのたわいない遊びがどんどん発展していつまでも遊ばれることもある。そうしたとき教師はちょっと、爪はじきをされた感じがするものだ。しかし本当は喜ばしいことである。

こうした遊びがスムーズに展開されるときは場面を考えてみると、時間的に、環境的に指導の面でも制約があまりないことがよい条件となっている。もちろん園生活の規律を考えた大まかなワクは忘れないことが大切であるが、わたしたちが従来水遊び、砂遊び、積木遊びなどに対してもっている常識を打破して種々の道具を出しておくことも必要であろう。

たとえば砂場では秤の古くなったものや、実物のゼリー型、ときには木の用や飛行機、古くなった積木、なわ、あきかんなどをおく、また積木のそばに籠をおき、この中にお父さんの古いカハンや

お母さんの不要になった衣類やハンドバッグをいれておくなど遊び道具については固定的に考えないで、いろいろのものをつかってみることも遊びを發展させる一つの原因ともなる。

水の使用も秩序の保たれる範囲内でゆるやかにしておくことである。「先生水いれてもいい？」と子どもがきくと教師は申しわけのようにチョロチョロと水をふりまいてさあ遊びなさいという。身体的にいつてこまかい筋肉の發達がまだ充分でない子どもたちはダムの兩岸やトンネルの山などをキッチリさせるため砂に充分な湿度がなければできない。遊びに相手の複雑性を望むなら水の使用ぐらい当然の事であろう。

五才児の終りまでには社会的な遊びが随分さかんになり、対人関係も複雑になってくる。その能力を増していく面が頭や口先だけに走ってしまわないように、知的社会的成長を受けとめるゆたかな素地をつくるために、自然の場での遊びをもっと取りあげたいと考えている。それが、五才児の生活にはわたしたちが日頃考えているよりもっと必要な面ではないかと考え直している昨今である。

(東洋英和短期大学)



五才児の砂遊びの記録

丸太で線路をつくる

すみお、ゆきよし、しんや、みちのぶ、砂場で丸太を滑らせているうちに、線路を作りはじめ。ひろことあいこがこれを見て、「トンネル作ろうよ。」と二人で作りはじめる。

誰と誰はこのトンネルへ入れてあげるなどという。しげあきとてつおはあいているところに丸太を滑らせながらお互に会うと「オス」と挨拶を交している。すみおとゆきよし、みちのぶとしんや、車庫を作りはじめる。山のてっぺんが車庫で、入口の坂から線路に通じて、あいこたちのトンネルへと念入りにこしらえている。線路は丸太を滑らせて型を作り作り、仕上げて行く。しんやはすみおの方へ路をつけたいらしいが、うまくいかない。すみおの作った路を少しこわして自分の路とつなげようとしているところを見つかってしまった。

「第一ずるいよ。大きくなったら泥棒になるよ。」

とすみおが力んでいう。ゆきよしもみちのぶも同感のようす。ゆきよし、てつおにもつけている。しんやは何とも言わず、車庫の方へまわり、みちのぶといっしょに橋をこしらえる。ゆきよしの方は山のすぐ下を掘りさげて行くので、そこはちょうど崖のようになっ

〈幼稚園の時期にどれだけのことを期待できるか〉

ている。

「この崖、すごいだろう。」

と誰にもなく言っている。トンネルはできたがすぐこわれたので鉄橋になる。大体の路ができる、それぞれ電車（丸太）を走らせてみる。

川をつくって水を流し橋をかける

あきはる、ひろふみ、しんや、よう、しんいちろう、しげあき、水を流しては川のように細長い水たまりをつくっている。どろんこになりながらおまもりの話をしている。

しんや 「おまもり、グローブの形している。」

よう 「僕、あきはるちゃんの組でいいよ。」

しんや 「僕、あきはるちゃんの組でいいよ。」

よう 「しんやちゃんは僕の組だものね。」

しんや 「僕、なっぺいい。」

しんいちろう 「僕、一回しかかったことないな、つまんないな。」

「僕、あきはるちゃんの組になっぺいい？」

あきはる 「うん。」

しげあきが穴を掘る。トンネルのようにして川を流す。しげあきは黙っている。みんな川のまわりに集ってまわりをかためている。スーパーマン、ロボットの話をする。



「てっちゃんのくだ、ながいのなあ。」

「眼が見えないの。」

あきはる 「めくらね。」

しんや 「それで、かおが乞食みたいななあ。」



と話し合うが、手は砂場の砂をいじっている。あきはるが水を流すと、トンネル（砂で造ってある）がくずれ。ようは水に浮いたありを見て、

「あっありんこが流れちゃう。」「かわいそうだね。」
そしてありをひろおうとする。その水の流れのところに電車（丸

太）を通す。する

と砂がくずれてくちやくちやになつてしまうので、あきはるが、

「やめ、電車やめ」という。みんな川の中で電車をひっぱりまわすのをやめる。

こんどは電車にしていた丸太を橋にする。川は三方に分かれていて、その中心は三角州になっている。そ

れに橋がかかっているわけであるが、その形はすぐに変化する。こんどは、しげあきが水をくみに行く。しげあきは砂でトンネルを造っていて、その下に水をくぐらせるようとしている。そこへつおが来る。砂場あそびの子どもたちに向かつて、

「けむしどこにいるか。」という。

あきはる、しんいちろう、よう「うるさい。」と口々に言う。

「いいですよ。」とてつお。そのうちに、ルミがてつおをひっぱりに来て、てつおは行ってしまふ。

ひろふみはやがてひとりて水をバケツにくみ、少しはなれたところでひしゃくとバケツで遊びだす。しんやが水をくんでくる。他の子どもは思い思いに砂を掘っている。しんやが来ると、ここからここから、というが、しんやは自分の思う通りに流す。残りの少しの水をようの方に流す。みんなドロドロの砂をこねまわし、だんだんに砂の山を大きくしている。川幅も広くなる。そこに、橋をかける前は一本だったが、こんどは二本丸太をつなげる。最初橋けたようなものを置いたがそれは不成功。その橋を、手をひろげておっかなびっくりといった足どりで渡る。

「なんだ、僕わたるよ。」と手をひろげて、やつとようが渡る。最後にランラ、ラランランと歌いながら渡る。うたは歌っているが、足の方は他の子たちと同じである。『足のおっかなびっくり』をうたでかくしているといった具合。それがすむと、

〈幼稚園の時期にどれだけのことを期待できるか〉

「さあ修繕をするんだ。」と言って、その橋をとってしまふ。丸太を川の真中へ置いてそのまわりを砂でかためたり、せきをつくったり、オダンゴをつくったりしている。

あきはるたちの方では、一時オダンゴつくりになる。しんやは橋の上にオダンゴを並べたりする。そこへ、こういち、ゆたかがやってくる。かわいた砂を、あきはるたちの掘っている川や、オダンゴの並んでいる橋の方に投げる。ゆきよしも来て砂をかける。

しげあき 「あきはるちゃんに言うぞ。」

「お当番のくせに、砂をいれていい？」と軽く言う。

ゆたか 「こっちに入れようとしたら、あっちにいったんだよ。」

ゆきよしはこういち、ゆたかと遊んでいたが、

「おとうさん、まくって。」と袖をまくってもらって、

「入れて。」という。

「山の組おゆうぎ。」と誰かが言う。それを聞いてゆきよしはすぐ、こわそうとする。

あきはる 「こわさないでくれ。」

ゆきよし 「こわさないよ。こわしたってこわさないよ。」と苦しい返事をする。みんなもこわしたくないらしい。

しかしどうとう、

ゆきよし 「どうしておゆうぎというのに、片づけないの？」

「こわさなければいけないのよ。」





あきはる、よう、しんやは丸太の上を走ってみる。それを見てゆきよしがしようとすると、あきはるが、「どうしてわたれるかっていうんだい。」

と、丸太の橋を渡るのを拒否する。

ようは「だって、こわすもの。」

とゆきよしにいう。とうとうみんな、そのままにして手洗い部屋にはいる。

丸太とあき缶の電車
で遊ぶ

やすお、ゆきよし、しんいちろう、てつおは砂場で電車の線路作り。そのそばで、こういち、ゆたか、たえこ、ひろふみ、ルミが砂ダンゴをつくってあそんでいる。やすおたちは、丸太の電車を動かしている。線路はあらかじめできているの

ではなく、丸太の電車を動かしているうち線路もできるといった場合の方が多し。ゆきよし、缶詰のあき缶を見つけて、それを丸太の上にかぶせる。

「こんなになっちゃったあ。」それを聞いてしんいちろうが、

「いいじゃないか。」急行列車がいい。」

と言う。それを聞いたゆきよしは、他の子どもに、

「これ新しいだろう。」と見せに行く。ゆきよし、その電車(?)を走らせる。

ゆきよし「おい、おいらの電車故障しちゃった。」

「それ、助けに来るのね。」

やすお「これ、助けに来る電車ね。」とたけの短かい丸太の電車のところを走らせて行く。また、砂を少し水でぬらして線路を掘る。

「これ急行。日本に二つしかない。」とてつおが言う。

「ほんとうは、そんなのないけどね。」

としんいちろう。こんな会話しながら、二人とも電車(?)を走らせている。しんいちろうは電車(丸太)を、穴を掘るようにつっこみ、その上に少し砂をかけて押しつけて、それからその丸太をひき出す。すると丸太のかっこうに穴があく。それを車庫と名づける。また、長さの短い丸太で鉄橋もつくる。ゆきよしは、

「おっこっちゃった、助けてくれ。」

みぞのようなどころに電車をつっこませて叫ぶ。